



Title	韓国における住宅庭の構成と住民意識について : 韓国大邱市を事例として
Author(s)	李, 榮大; 浅川, 昭一郎
Citation	北海道大学大学院環境科学研究科邦文紀要, 5, 19-32
Issue Date	1990-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37080
Type	bulletin (article)
File Information	5_19-32.pdf



[Instructions for use](#)

韓国における住宅庭の構成と住民意識について —— 韓国大邱市を事例として ——

李 榮大・浅川昭一郎

北海道大学大学院環境科学研究科花卉・造園学講座

The structure and consciousness of private garden in Korea Young dae Lee and Shoichiro Asakawa

Department of floriculture and Landscape Architecture,
Division of Environmental Conservation,
Graduate School of environmental Science,
Hokkaido University, Sapporo, 060

I. はじめに

都市における住宅の庭は観賞や戸外室としての利用に加え、実用や緩衝などの機能を果たし、居住者の居住環境向上に大きく寄与している²⁾。さらに、居住地における緑の多くは庭に存在する緑に依存する場合が多いため、庭の緑の良否が地域の緑地環境、景観などにも影響し、公的な視点からの評価も重要である¹⁾。また、居住者の緑の満足度にも影響を与え、庭付住宅の居住者は庭のない人に比べて、また庭の所有面積が広いほど緑の満足度が高いことなども明らかにされている^{8,11)}。このような住宅庭に関して公的視点から、日本では建設省による都市緑化技術開発調査委員会によって住宅敷地緑化基準作成を目的とした調査分析が行われているが対策としては緑化協定などがあるにすぎない。一方、韓国では建築法に基づいて各自治体の条例で敷地規模別義務緑化面積基準が公表されているがその実効性に関しては明らかにされていない。

また、住宅敷地のような私的空間における緑化は所有者の意志や敷地の利用構成などによって影響を受けやすい¹⁾。特に、歴史的・文化的背景が異なれば当然庭の構成や意識は変わることが考えられる。本研究では、日本とは背景を異にする韓国の大邱市における住宅を事例として取り上げ、緑化条件を明らかにすることを目的とし、敷地内の庭の構成とそれに関する住民意識を把握しようと試みた。

II. 調査方法

分析に用いた調査は1986年6月韓国大邱市で行った「住民の緑地意識に関する調査」の一部(以下調査1)と、1989年5月同市で行った「大邱市緑地環境に関する調査」(以下調査2)である。調査1は既に報告しているもので、地区特性を異にする市内10地区(1地区約500×500m)を選び、各地区約200世帯の世帯主もしくは主婦を対象として質問表の留置法で行った⁸⁾。また、回答者の主な属性をみると20代以下が43%、30代が32%、40代が20%、それ以上が5%で、性別では男性が45%、女性が55%であった。また、住宅は持ち家78%、戸建て住宅75%である。

一方、調査2は大邱市の異なる用途別地域、すなわち、住居地域、住居専用地域、商業地域に位置してい

表-1 調査地区の特性(調査2)

調査小学校	
A(DONGDO)	: 住居地域であり、近くに子供大公園があり比較的新しい住宅が多い地域(N=72)
B(SINCHUN)	: 住居地域(N=115)
C(HWANGGUM)	: 住居専用地域であり比較的新しい住宅地(N=95)
D(SUSENG)	: 住居地域と一部住宅専用地域が含まれ、C地区と隣接している(N=111)
E(JUNGANG)	: 商業地域に位置し、市の中心部にある(N=107)
F(DONIN)	: 商業地域と住宅地域が混在し、E地区と近い(N=89)
G(AYANG)	: 住居地域であり、近くには遊園地や山がある(N=81)
H(DAEMYNG)	: 住居地域、住宅専用地域が混在している地域であり、近くには山があり、その山は公園として利用されている(N=103)
I(NEDAN)	: 住居地域(N=100)
J(DAEGU)	: 商業地域(N=110)
K(JONGRO)	: 商業地域(N=103)
L(SEODO)	: 住居地域(N=106)
M(PYUNGRI)	: 比較的工業団地に近い住居地域(N=85)
N(SINHUNG)	: 住居地域であり比較的新しい住宅が多く存在し、近くには運動場、山、公園などがある(N=68)

るか、あるいはそれらが混在している校区を有する14校を選び、各校当り2学級を対象としてその父兄に調査用紙を配り3日後回収した。回答者の年齢層は30代が52%、40代が44%と、この両年代に集中しており、性別では男性が47%、女性が53%であった。また、住宅は持ち家が58%、戸建て住宅が78%であり、学歴は中卒以下が31%、高卒46%、大卒が21%であった。調査1と2における年齢や持ち家、戸建ての比率の差は調査方法による違いと考えられる。なお、調査2における庭の満足度は戸建て住宅の庭所有者のみを対象とした。

表-1には調査2における地区の特性及び有効枚数を示し、表-2には調査1と2で用いた質問項目を示した。

表-2 調査内容

調査1	
1.	敷地内の緑の配置(庭所有者のみ) 8種類の異なった配置形から、最も近い形態の一つを選択
2.	所有庭に対する広狭感(庭所有者のみ) 広い、適当、狭いの3分類から選択
3.	所有庭に対する狭いと感じる場合その理由 (13項目から1つ選択) (庭所有者のみ)
4.	希望庭面積 5段階(本文参照)の内1つ選択
調査2	
1.	敷地面積、建築面積、マダグ面積 希望敷地面積、建築面積、マダグ面積の記入
2.	高木の本数(3m以上)、低木の本数(3m以下) (戸建て庭所有者の内)
3.	庭に対する満足度(戸建て庭所有者のみ) (非常に満足—非常に不満までの5段階評価)
4.	希望庭面積 最大面積、最小面積の自由記入
5.	敷地内のマダグや樹木が必要な理由 それぞれ11項目、10項目から3つを選択

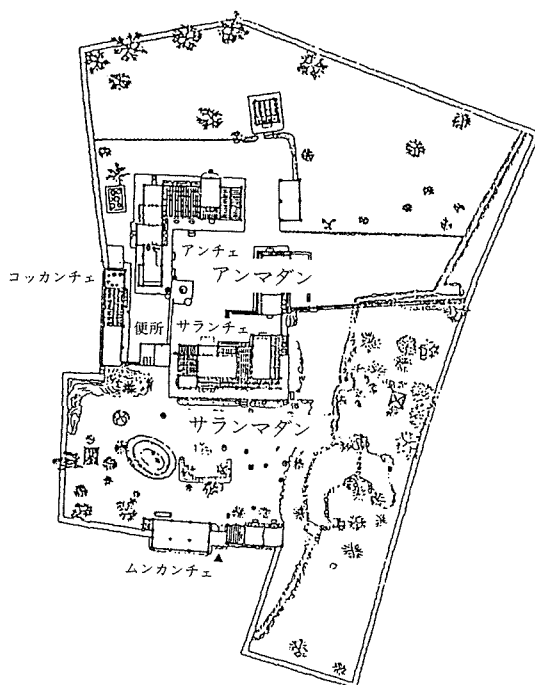
III. 結果及び考察

1. 敷地構成と庭の状況

1) 韓国都市住宅の一般的構成

韓国における住宅とその敷地構成は建築技術や材料の発達、社会的意識の変化によって変わり、庭もそれによって時代と共に変化してきた。ここでは、まず、韓国の住宅における特徴と考えられるマダンについて簡単に述べる。

図-1に示されている住宅平面構成は現在残されている上層農家の一つの例であり（地方によって建物の配置は異なる）、伝統住宅の平面構成と類似していると考えられる¹³⁾。これに示すようにいくつかの棟（建物）から成り立ち、アンチェ（内棟、主婦の生活場所）とサランチェ（舎廊棟、主人の生活場所）によってアンマダン（中庭）を囲む構成を基本とする。さらに、図には示していないが場合によっては、サランマダンに囲まれていたヘンランチェ（使用人の生活場所）があり、その外側にはヘンランマダンが存在することもある¹³⁾。このように、それぞれの棟にはそれに付属するマダンがあり、そのマダンは棟の機能によって使い方が決められる。すなわち、アンマダンは家事の副空間として主に主婦の生活空間であり、サランマダンは主人の日常生活、接客などに使われ、最も品位を強調する空間で木や花などを植え、庭園化する場合が多く、ヘンランマダンは農作業などの作業空間になる。また、庶民住宅はアンチェとアンマダンの構成による場合が多いため、農作業、家事、子供の遊び場、家族行事などの多用途的空間になるが、規模が大きくなるといく



（忠清南道外岩里の事例）

図-1 韓国における上層農村屋敷の構成¹³⁾

つかの棟を持ちそれに付属するマダンを持つこともある¹⁴⁾。すなわち、マダンは棟と棟の間に位置する非建築部分であり、その数は棟に比例しており、家事の副空間、作業場、緑化空間などの空間として使われる。

しかし、建築技術の発達、都市化による敷地の狭小化などによってアンマダン一つを主にする構成になり、アンマダンの役割の内では室内に移行可能な部分、例えばトイレや洗濯、家事などの主婦の仕事の多くの部分が室内に移り、室内に移ることができない緑化部分が広がる傾向があると考えられる¹⁴⁾。そして、現在の韓国の敷地の非建築面積は緑化されていないマダンと緑化されているマダンになるが、緑化されているマダンは庭園や花壇と呼んでいるのが一般的と考えられる。

なお、図-2に示すのは住宅所有関係の内で、戸建て住宅における持ち家とゾンセ世帯が同居する場合を示している^{13,14)}（洋屋2階住宅の場合2階全部をゾンセ世帯にすることもある）。なお、戸建て住宅におけるゾンセ世帯とは一つの住宅に全く異なる2世帯以上が同居するものをいい、日本でいう間借り、貸家とは異なっている。また、この場合屋外部分に対しては持ち主の意志によって使用の有無が異なると考えられる。

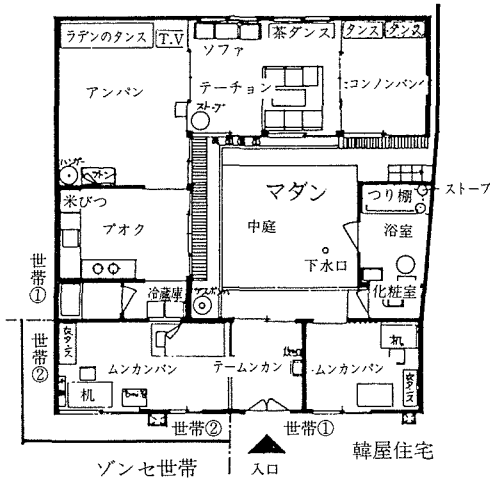
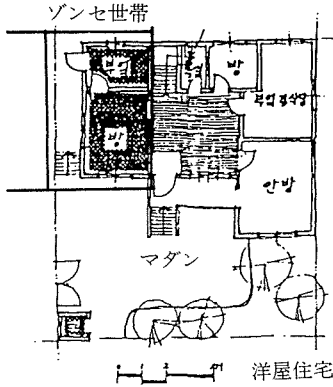


図-2 韓国における現代都市住宅の平面構成^{13,14)}

表-3 敷地構成比率

敷地面積 (m ²)	建ぺい率 (%)	マダン率 (%)	N
-50	81.0 (81.3)	25.7 (20.0)	21 (6)
51-100	69.2 (70.3)	23.5 (21.5)	143 (67)
101-150	70.5 (67.5)	17.7 (17.6)	240 (126)
151-200	67.2 (68.1)	20.3 (23.0)	210 (91)
201-250	65.5 (64.2)	23.5 (28.6)	82 (48)
251以上	56.8 (52.6)	28.3 (29.8)	89 (42)

() は持ち家の場合

注) 建ぺい率とマダン率の合計が100%を越える場合があるが、これは各構成面積を自由回答で求めた際の記入誤差による。

表-4 調査地区の平均敷地構成と希望面積

	現住敷地面積		要求敷地面積	
	全体*	持ち家	全体	持ち家
敷地面積 (m ²)	165	162	207	228
建築面積 (m ²)	112	109	131	145
建ぺい率 (%)	68	67	63	64
マダン面積 (m ²)	37	41	73	83
N	784	380	705	370

*. 持ち家とゾンセ・その他

2) 敷地構成の現況

調査2における回答者の住宅敷地について敷地面積、建築面積、マダン面積を分析した。

表-3及び4は調査地区における平均敷地面積及び規模別に建ぺい率とマダン率を示したものである。平均敷地面積は165m²、建ぺい率は68%となっており、住宅所有形態からみてもその比率はほぼ同じである。また、サンプル数が少ない50m²以下を除くと建ぺい率は敷地面積の増加に比べてほとんど変化がみられず、敷地面積251m²以上で少し下がる程度である。これらの面積を韓国の他の都市と比較すると、ソウル市の平均敷地面積は地域によってばらつきが大きく、調査地区の内、中流住宅地域の平均敷地面積は148m²、建ぺい率61%、非建築面積60m²と報告され⁷⁾、経済企画院の調査ではソウル市全体の住宅の平均敷地面積はおよそ80m²と報告されている⁵⁾。また、地方中小都市である水原市の調査では調査地区の平均敷地面積187m²、建築面積87m²、建ぺい率47%とし³⁾、大邱市の調査地区の平均敷地面積はソウル市と地方中小都市の中間程度、建ぺい率はソウル市と類似していると考えられる。なお、札幌市における戸建て住宅は全体の43%、平均敷地面積は210m²である¹²⁾。

ここで、敷地面積と建築面積との関係は以下のような関係が認められた。

$$Y = 0.468 X + 30.17 \quad (R = 0.79); \quad (N = 710, \text{ およそ } 330 \text{ m}^2 \text{ 以下})$$

Y: 建築面積 X: 敷地面積

居住者がどの程度の面積を求めているかを調査2によって調べ、その平均をみると、平均敷地面積は207 m²、建築面積131 m²、マダン面積73 m²で建ぺい率63%程度になり、敷地面積は広くなるものの建ぺい率は現実の状態とはほぼ同じである。また、希望する敷地面積を現住敷地規模別にみると、150 m²までの場合、151-200 m²を求める人が多く、151 m²以上の場合は同程度かこれより広い面積を求める傾向がみられ、従って敷地面積151-200 m²が希望最低敷地面積と考えられる。なお、住宅所有形態別からみると持ち家居住者では敷地面積228 m²、建築面積145 m²、マダン面積83 m²で建ぺい率64%になり、ゾンセ世帯で敷地面積187 m²、建築面積115 m²、マダン面積62 m²、建ぺい率62%で両方共に建ぺい率はほぼ同じであるが、敷地面積は持ち家居住者の方がより広い面積を求めていることになる。

なお、韓国における建ぺい率は表-5に示すように住居、住居専用地区で50-60%を越えることはできないことになっている⁴⁾。今回の調査ではこの比率を越える場合があるが、これには回答誤差や規定以上の住宅が含まれていることが推察される。しかし、多くの場合は建ぺい率は建築法によって定められている上限にまで達しているものと考えられる。

3) 敷地面積と庭木との関係

表-6は調査2を用いて求めた大邱市における敷地面積別平均樹木本数及び無樹木率(高木及び低木)を示している。なお、樹木は便宜上高さが3m以上を高木、それ以下を低木とした。

まず、平均高木数は3.62本、低木は4.99本で、敷地規模の増加に伴う樹木数の増加は明かであるが著しい変化ではない。ここで、無樹木住宅の敷地面積をみると高木、低木による相違は少なく、敷地面積151 m²以上から顕著な減少がみられ、敷地面積201-250 m²で最も低くなる。しかし、住宅所有関係からみるとゾンセ世帯で無樹木比率が高く、持ち家で低いことがわかる。また、持ち家の場合、敷地面積251 m²以上で比率が多少高くなる傾向があるが、これはサンプル数が少ないことによるものと考えられ、敷地面積201 m²以上になると無樹木率はあまり変化しないと理解できる。一方、ゾンセ世帯で無樹木率が高いのは自分の家でないため樹木があっても無いと答えたことも考えられる。また、表-7には非建築面積別無樹木率を示しているが面積の増加によって無樹木率は明らかに減少し81 m²以上で約30%と最も低く、敷地面積と同様ゾンセ世帯より持ち家の方がより低い傾向がみられた。

表-5 韓国における用途別建ぺい率及び最小敷地面積

用途地域	建ぺい率(%)	最小敷地面積 (m ²)
住居専用地域	50	150-300
住居地域	60	60-120
準住居地域	70	70-140
商業地域	70	150-400
専用工業地域	60	200-400
工業地域	60	200-400
準工業地域	60	150-300
自然緑地地域	20	350-700
生産緑地地域	20	150-300
無指定地域	60	70-140

(韓国建築法39条による)

表-6 敷地面積別無樹木率及び平均樹木本数

敷地面積 (m ²)	無高木 (%)	無低木 (%)	平均高木 (本)	平均低木 (本)
-50	86.7 (100.0)	86.7 (100.0)	2.0 (0.0)	2.2 (0.0)
51-100	77.3 (79.5)	74.8 (80.0)	1.5 (2.7)	2.8 (3.8)
101-150	61.9 (49.5)	56.7 (55.4)	1.5 (2.3)	3.7 (4.0)
151-200	36.3 (14.3)	33.7 (19.2)	2.8 (3.2)	4.2 (5.2)
201-250	14.8 (2.2)	16.0 (6.5)	4.6 (5.3)	6.4 (6.6)
251 以上	30.1 (7.7)	31.3 (10.3)	5.9 (6.2)	6.8 (7.3)

()は持ち家の場合

表-7 非建築面積別無樹木率及び平均樹木本数

非建築面積 (m ²)	無高木 (%)	無低木 (%)	平均高木 (本)	平均低木 (本)
-20	68.3	70.5	1.9	3.2
21-40	57.5	45.8	1.9	3.7
41-60	48.1	47.7	2.9	3.9
61-80	39.4	35.8	3.3	4.3
81以上	30.3	28.7	4.2	5.3

この結果、1本以上の樹木を存在させるためには敷地面積の最低は151 m²以上になり、201 m²以上が望ましく、非建築面積は81 m²以上が望ましいと考えられる。ここで、敷地面積151 m²の場合の建ぺい率は46%、201 m²では建ぺい率60%になる。また、敷地面積201 m²以上、非建築面積81 m²以上を満たす住宅は全体の12%に過ぎなく、樹木存在率はおよそ70%である。

一方、札幌市では安定樹木植栽のための最低敷地面積を151 m²以上とし、251 m²以上が望ましく、非建築面積は低木では76-100 m²、高木では126-150 m²とし、建ぺい率は最低50%で、35%以下が望ましいと報告されている¹⁾。また、田代は敷地内の緑被の限界条件として敷地面積100-150 m²以上、建ぺい率40%以下、空地面積70 m²以上、標準条件として敷地面積150-200 m²、建ぺい率30%以上としている。また、無樹木数は敷地面積110 m²以下に限られ、敷地面積150 m²以上、建ぺい率60%以下で10本以上の住宅が存在しているとした¹⁵⁾。これらと比較すると、敷地面積に関しては大邱市とほぼ類似しているが建ぺい率が大邱市でかなり高い。すなわち、大邱市ではより高い建ぺい率でも樹木が存在することになる。

なお、今回分析に用いた敷地面積、建築面積はアンケートに記入された面積であるため多少誤差が含まれていることも考えられるので厳密な基準を求めるのには実測による裏付けが必要であろう。

なお、大邱市で無樹木住宅が敷地面積151 m²以上から著しく低くなるのは大邱市建築条例(1980年から実施)の影響があると推測される。この条例によると敷地面積165 m²以上の建物には造景面積(緑化面積に相当する。緑化面積は延べ床面積によって変わり、敷地面積の5-15%の範囲であり、緑化面積5 m²当り2 m以上の樹木1本で、戸建て住宅の場合の緑化面積率はほとんどが5%になる)が義務づけられている⁴⁾。ここで、条例施行以降に建てられた住宅が多いと考えられるC地区では樹木が存在する住宅率が90%、K地区では80%以上であり、条例の影響が十分推察される。また、この条例に従って緑化する場合大邱市の平均敷地面積165 m²では緑化面積が8 m²、2 m以上の樹木は2本程度になり、今回得られた平均樹木数と大きな違いはみられなかった。

なお、大邱市住宅内に植栽されている樹種は落葉樹の内では木蓮が最も多く、花梨、銀杏が続いている。また、常緑樹はイブキ、コノテカシワが、灌木ではバラ、ツゲが多い¹⁰⁾。

4) 敷地内の緑の配置

図-3は調査1によって敷地内の緑の配置の分類及びその比率を示したものであるが、敷地内が緑化されている住宅の内では前庭型が約39%で最も多く、後庭型、点景型が続き、緑化面積によって異なることがみられた。すなわち、緑化面積15 m²未満では当然ながら点景型が多く、33-65 m²までには前庭型、後庭型が多くなり、66 m²以上になると普通型の比率が多くなる。また、全体の比率は少ないが165 m²以上では外周型が多い傾向がみられた。すなわち、緑化面積65 m²までには1面緑化が、66 m²以上では2面緑化が多くみ

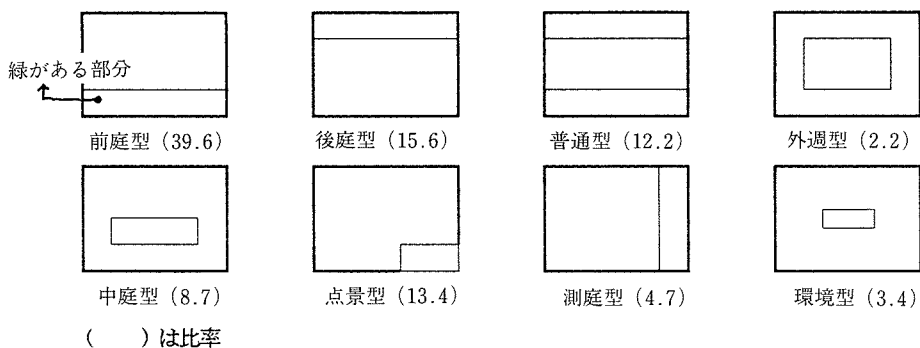


図-3 敷地内の緑の配置

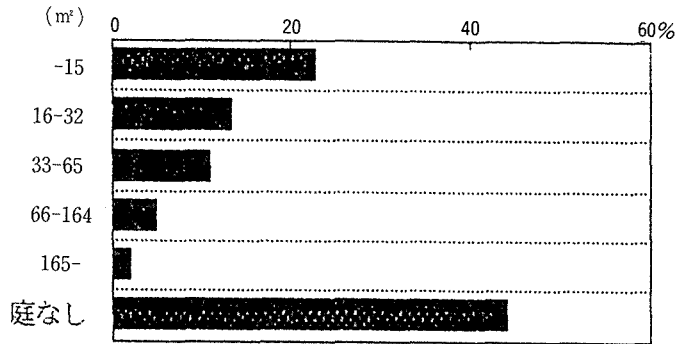


図-4 所有する庭の面積比率

られ、165㎡以上になると3面緑化が多くなる。しかし、大邱市において現在所有している庭の面積を尋ねると図-4に示すように、所有していない人が42%、33㎡未満が約36%、33-65㎡が12%であり、この面からも半数近くの住宅が1面緑化になっていることが推察される。また、大邱市住宅庭園の調査結果からも前庭型が36%で最も多いとされ¹⁰⁾、この配置が主な緑配置と考えられる。

一方、札幌市においても前・側庭型、前庭型の比率が高く¹⁾、両市共に共通で前庭型が多いが、これは敷地内における建物の配置と道路との関係に起因していると考えられる。

2. 庭に対する意識

1) 庭に対する満足度

図-5は調査2によって得られた庭所有者の庭に対する満足度（非常に満足-非常に不満までの5段階評価を満足、不満、どちらともいえないの3段階にまとめた）を示すものであり、非常に満足するとした比率は6%程度であるが、満足を加えるとおよそ50%が現在の庭に満足すると答えている。また図-6に示すように不満、非常に不満と答えた人の70%が庭の面積に不満を持っており、樹木が少ないことを不満の理由とした比率は10%程度である。

なお、表-8は同じ調査で個人属性、敷地面積を取り上げ、庭の満足度を満足、不満、どちらともいえないの3段階にまとめて χ^2 検定を行った結果であるが、有意性がみられたのは敷地面積、住宅所有関係、住ま

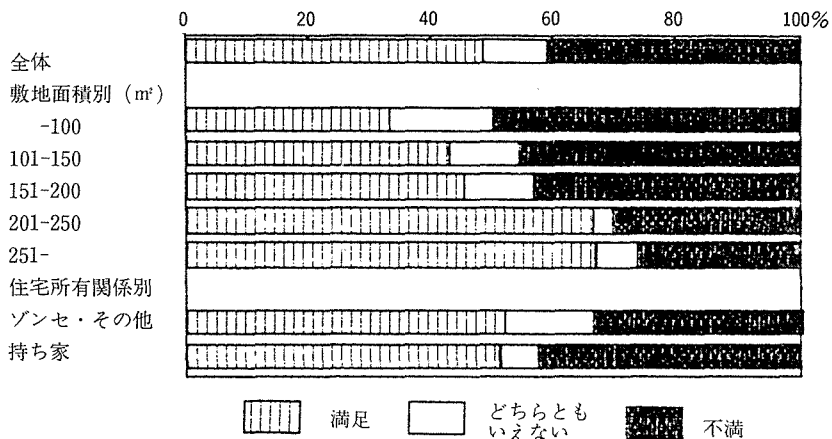


図-5 庭に対する満足比率

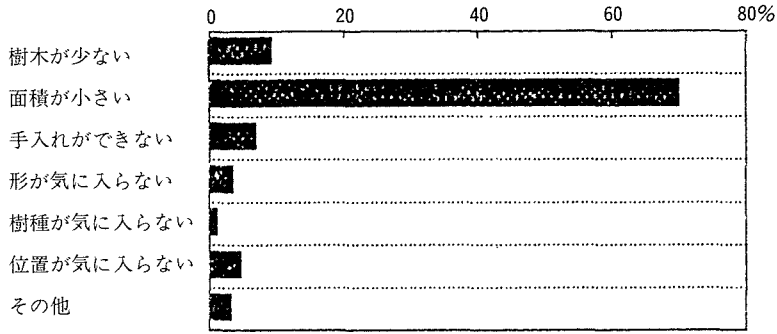


図-6 庭に対する不満の理由

表-8 各評価項目における χ^2 検定結果

属性	満足度	庭要求面積 (最大面積)	マダンを必要とする理由 ^{A)}						樹木を必要とする理由 ^{B)}						
			1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	
性別	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
学歴	*	**	*	**	**	—	**	—	—	—	—	—	—	—	**
所得	—	**	**	**	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	**
住宅所有関係	*	**	—	**	—	**	*	**	—	—	—	—	—	—	*
敷地面積	*	**	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マダンの有無	—	—	—	*	—	—	—	—	*	—	—	—	—	—	—
住まい予定	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
庭の有無	×	**	**	—	—	*	—	—	—	—	—	—	*	—	—
庭の満足度	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
住宅形態	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	—	—	—	—	—

** P<.01 * P<.05 ×; 該当しない

A) マダンを必要とする理由

- 1) 木や花を植える場所、2) 物置場、3) 軽い運動場所、4) 子供の遊び場所
- 5) 家族の休養場所 6) 室内への通風や日当りをよくする場所

B) 樹木を必要とする理由

- 1) 空気をきれいにする、2) 季節感を得る
- 3) 樹木や花の手入れを楽しむ、4) 樹木や花を眺める(観賞目的)
- 5) 植物や鳥などの自然の雰囲気を得る、6) 精神的安らぎを得る

い予定、学歴であった。この内、学歴別や住宅所有形態別では、中卒層やゾンセ世帯で不満がやや少なく、どちらもいえないの比率が高い。これは、ゾンセ世帯の場合、住宅に対する所有意識が低いため評価における不満を感じる比率が少なく、曖昧な答えをすることが多いためと考えられ、さらに学歴別では中卒以下でこのような傾向が高い。また、図-5は敷地面積別の満足度比率を示したものであるが敷地面積が広くなるほど満足比率は高くなり、どちらもいえないと答えた比率も少なくなる。また、住まい予定別でも定住したいと答えた人が満足する比率がより高く、不満やどちらもいえないの比率が低くなる。なお、学歴や敷地面積、住まい予定の間には有意性がみられ、これらの関係が満足度に影響していると考えられる。すなわち、学歴や住宅所有関係は庭の満足度評価を行うに際し曖昧さに影響し、敷地面積は満足、不満をより明確に分ける要因と考えられる。なお、当然ながら敷地面積は庭の面積に関連が強く、ここでの敷地面積も庭の面積の影響が含まれていると推察される。一方、庭の満足度と樹木本数(高木、低木)、樹木の多少感との関係をみると相関係数が低く、樹木の多少は庭の満足度あまり影響していないことがうかがえる。しかし、これは現在植栽されている高木、低木共に5本未満が70-80%と大部分を占め、樹木が多い住宅が少ないこ

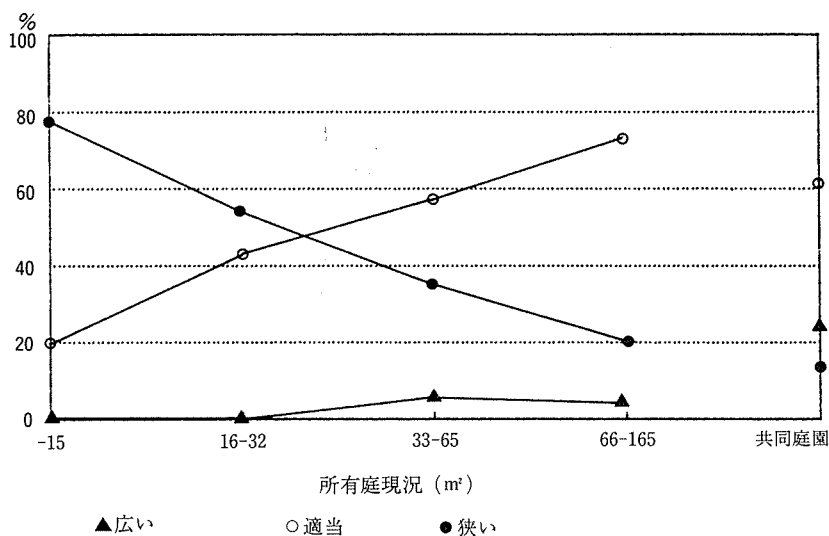


図-7 所有する庭に対する広狭感

ともよると考えられる。

一方、調査1による現在の庭所有面積に対する「広すぎる」「適当」「狭すぎる」の3つの判断では、広すぎると答えた人は4%に過ぎなく、40%が適当、56%が狭すぎると答えていた。これを、所有面積別にみると、狭すぎると答えた比率は15 m²以下で80%と最も高く、66 m²以上になると20%となり面積の増加に伴って減少する(図-7)。ここで、庭に対する不満理由で多くの人が面積の狭さを理由として挙げているが、これは所有面積が33 m²以下の住宅が多く含まれていることによると考えられる。また、狭いとした理由は「子供の遊び場や家族の団らん・休養」が最も高く、続いて「花や野菜を植える場所」「樹木から季節感を得る」「空気をきれいにする」などを挙げた人が多くみられた。また、適当とした比率をみると庭面積16-32 m²以下では43%、33-65 m²では58%、66 m²以上では70%以上である。ここで、庭面積66 m²以上の住宅では狭いと感じる比率も少なく、70%以上の人が適当な面積としており、この面積が望ましい庭面積と考えられる。

2) 必要とする庭面積

前述のように庭の満足度には庭の面積が強く影響することが明かであるが、次に直接希望面積を尋ねた(調査1及び2)。

まず、調査1によって現有庭面積を庭なし、15 m²以下、16-32 m²、33-65 m²、66-164 m²、165 m²以上に分けてそれぞれの希望庭面積を求めると図-8が示すように現在の庭の所有の有無や面積によって希望面積が異なり、現在所有する面積よりやや広い面積を求める傾向がみられた。その内容をみると現有庭面積65 m²以下では所有面積よりやや広い面積を求めるが、66 m²以上になると同じ程度の面積を求める場合が多くなる。従って多くの人の希望庭面積は約66 m²以上と考えられ、庭の広狭感で得られた66 m²以上と一致している。

さらに、図-9に示す累積比率から最大希望面積では33 m²が最も多く、続いて66 m²、99 m²、165 m²で、最小面積では33 m²が最も多く、続いて16 m²、66 m²、10 m²の順になり、最大、最小共に33 m²を挙げる比率が最も高かった(調査2)。ここで、個人属性と最大希望面積との関係を χ^2 検定によってみると所得、学歴、住宅所有関係、敷地面積、住まい予定、庭の所有関係で有意であった(表-8)。その内容は所得や学歴が高くなるほど希望面積は広く、また敷地面積が広いほど、定住する意識があるほど広い面積を求めている。ま

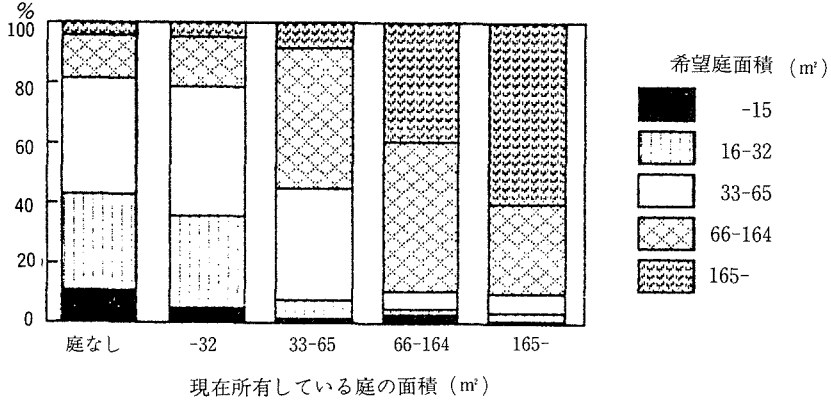


図-8 所有する庭面積別の希望庭面積

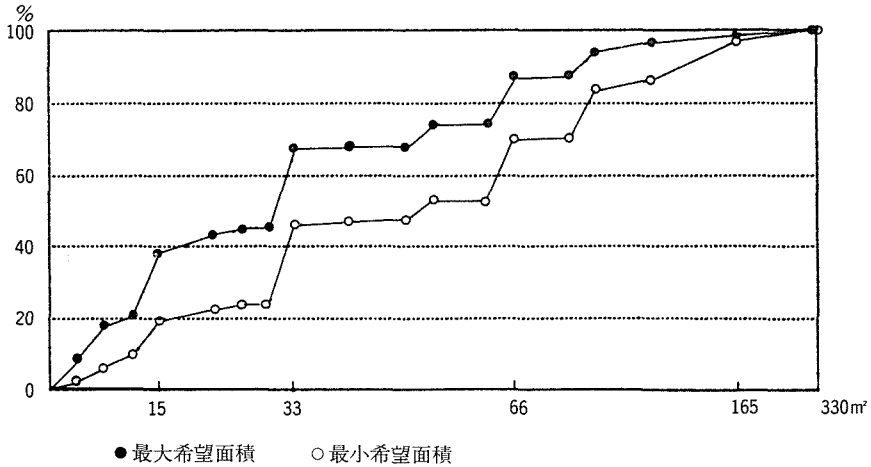


図-9 希望する庭の面積

た、庭の所有関係からみると、所有する人がそうでない人より広い面積を求める傾向がみられ、庭の無い人は 33 m² までで最大、最小面積それぞれ 55%、78% を占めているのに対して、庭を所有している人は 37%、57% と希望する面積はかなり異なる。また、図には示していないが、調査 2 によると調査 1 とはやや異なり庭がない人は 33 m² に 40% が集中しているのに対して、所有している層では 33 m² に 26%、66 m² に 23%、67 m² 以上に 21% を占め特定の面積に集中する傾向はみられない。また、庭に対する不満の理由としては庭の面積の狭さを多くの方が挙げたが、満足度と希望面積との間には有意性がみられなかった。従って、庭に対する満足、不満を問わず理想的に考える面積は同じであることを意味し、所有面積の規模によって希望面積が強く影響されると考えられる。

3) 敷地内のマダンを必要とする理由

調査 2 において敷地内のマダンを必要とする理由を調べるため図-10 に示す 11 項目を用いて最も強く必要な理由から 3 番目までを選択させた。また、この項目の内、「樹木を植える場所」を選択した人にはさらにもどのような理由で樹木が必要とするかを同じ方法で 10 項目から選択させた。

まず、マダンが必要かどうかを尋ねると必ず必要とした比率は 57%、必要が 36% で合計すると全体の 93% に達し、敷地内のマダンの重要性がうかがえる。また、図-10 に示すように、敷地内のマダンを最も強く必

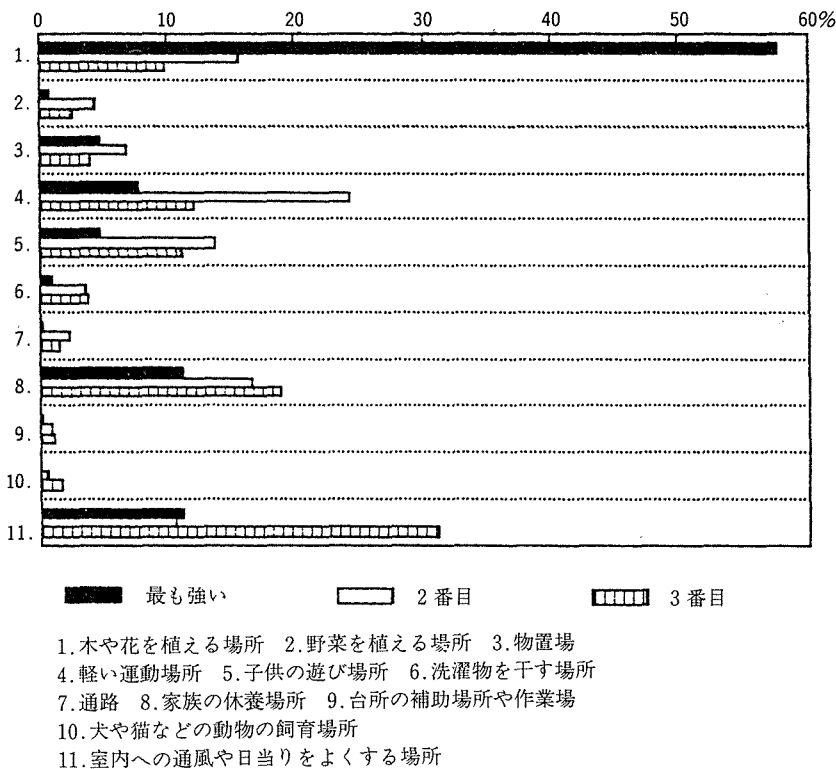
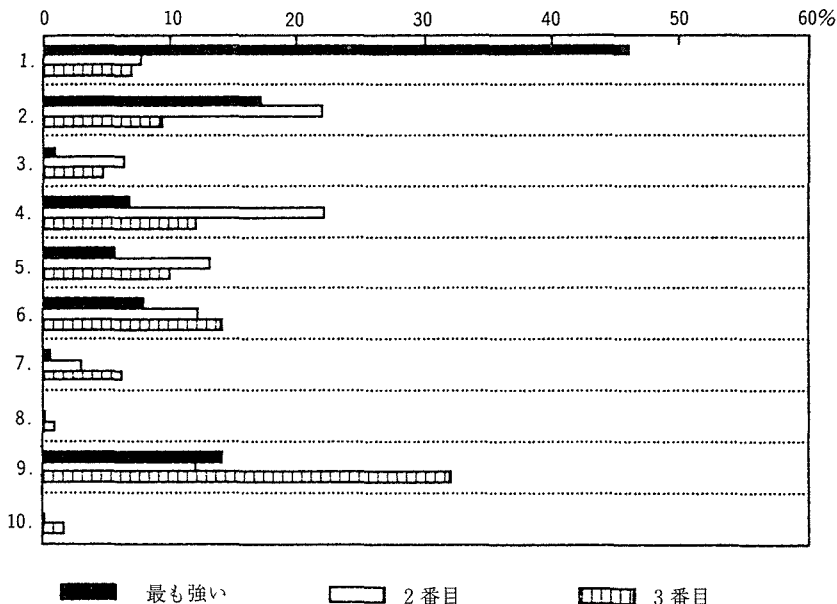


図-10 マダンを必要とする理由

要とする理由としては「木や花を植える場所」が58%で最も高く、2番目には「軽い運動場所」が24%、「家族の休養場所」が17%、3番目には「室内への通風や日当りをよくする場所」が31%で他の項目より高い。

なお、マダンを必要とする理由の内、上位6項目と敷地面積、性、学歴、所得などとの関係を取り上げて項目毎に χ^2 検定を行った(表-8)。その結果、「木や花を植える場所」「物置場」が多くの属性との間に有意性がみられ、属性の内では学歴、住宅所有関係が多くの項目との間に有意性がみられた。特に、「木や花を植える場所」を理由とした場合、持ち家、敷地面積がより広い住宅、庭を所有している住宅でその比率が高く、加えて学歴が高いほどその比率が高い。また、「物置場」を必要理由として挙げた場合は所得が低いほど、学歴が低いほど、住宅を所有していない層やマダンが無い層でその比率は高い。このことはソウル市におけるマダンの使い方調査結果から敷地面積が広がると「庭園」の比率が高く、敷地面積が狭くなると洗濯場所、物置場、家事の補助場所などの比率が高いとの報告にも対応している⁷⁾。

一方、図-11に示すように樹木を最も強く必要とする理由としては「空気をきれいにする」が46%で最も多く、続いて「季節感を得る」が17%、「精神的な安らぎを得る」が14%であり、2番目には「季節感を得る」「木や花の手入れの楽しむ」が、3番目には「精神的な安らぎを得る」「植物や鳥などの自然感を得る」が多い。一方、住宅内の樹木の公的役割、即ち「道路や周りの景観をよくする」に対してはいずれの場合も比率が低い。東京都における調査では住宅画地の中の緑が地区の緑地環境形成に役立つと認識している人は70%以上で、特に住宅の外圍構成が樹木タイプ・折衷タイプでは90%以上の人が役立つと認識し、構造物の場合は役立つないとしている比率が高いと報告されており⁸⁾対照的な結果と考えられる。なお、韓国の住宅では中庭式住宅もあって一般に高い塀(コンクリートやブロックなど)で囲まれており⁹⁾、このことが住宅景



1. 空気をきれいにする 2. 季節感を得る 3. 道路や周りの景観をよくする
 4. 樹木や花の手入れを楽しむ 5. 樹木や花を眺める (観賞目的)
 6. 植物や鳥などの自然の雰囲気を得る 7. 樹木の品位や外からの眺めをよくする
 8. 来客のため 9. 精神的安らぎを得る 10. 防音や防火のため

図-11 樹木を必要とする理由

観の相違にもなっていることが推測され、庭の緑を公的な視点から評価しようとする住民意識が低いことに関連しているかもしれない。

ここで、最も強く必要とする理由の内では比率が5%以上の上位6項目を取り挙げ χ^2 検定によって属性との関係を調べた (表-8)。項目の内、「植物や鳥などの自然の雰囲気を得る」に対しては所得、学歴、住宅所有形態が、「季節感を得る」は住宅形態と有意性がみられ、「観賞的目的」は庭の所有関係と有意性がみられた。この内容を見ると所得が低いほど、学歴が低いほど必要とする比率がやや高い。また、持ち家層で「季節感を得る」を、庭所有層で「観賞的目的」を上げる比率がやや高い。敷地面積、住宅所有関係、学歴の間には相互関係があるが、これらの要因がマダンの必要理由や樹木を植える理由に影響していると考えられる。また、このような傾向は札幌市における調査結果とも類似している。

摘 要

居住地の緑の評価における庭の重要性は日本及び韓国において既に報告されている。ここでは、韓国における住宅緑化に関する基礎資料を得るために大邱市を事例として取り上げ、住宅敷地構成、住民の庭に対する意識をアンケート調査を用いて行い、以下のような結果を得た。

- 1) 住宅敷地内に樹木を存在させるためには敷地面積が最低 151 m² 必要で、201 m² 以上が望ましく、非建築面積 81 m² 以上が必要であることが明らかになった。
- 2) 必要とする庭の面積は所有している庭面積によって異なっているが、最低 33 m² で、66 m² 以上が望ましいと考えられる。
- 3) 庭の満足度、マダンを必要とする理由、樹木を必要とする理由、希望する庭面積など庭と関連した分析

結果では、学歴、住宅所有関係、敷地面積などが強く影響していた。

- 4) 大邱市における住宅敷地は高い建ぺい率の影響で樹木量が少ないと考えられる。
- 5) 大邱市でマダンを必要とする理由と札幌市で庭を必要とする理由に大きな違いはないが、樹木の公的役割に対する意識はかなり異なっている。
- 6) 今後の緑化計画には住宅形態、塀の構成、住民の意識などを反映する必要があると考えられる。

引用文献

- 1) 浅川昭一郎・中田三喜男 (1983) : 北海道における都市住宅地敷地の緑化について—敷地条件と緑化—北海道大学農学部邦文紀要 **13** (4), 500-506
- 2) 浅川昭一郎・奥村実義 (1981) : 都市住民の庭需要について, 北海道都市第 18・19 号, 1-22
- 3) 韓承鎬ら (1984) : 住居環境の適正オープンスペース規模に関する研究—水原市中所得低層住宅地を中心として—, 韓国造景学会誌 **12** (2), 53-72
- 4) 田耕培ら (1987) : 建築法規解説, 世進社
- 5) 経済企画院 (1981) : '80 人口及び住宅センス暫定報告
- 6) 金子忠一 (1986) : 都市住宅地の緑地環境管理計画に関する基礎的研究, 造園雑誌 **49** (5), 263-268
- 7) 金徳三 (1982) : 住宅地緑地確保のための外部空間活用に関する研究—ソウル市単独住宅居住住民の意識調査を中心として—慶熙大学大学院造景学科修士論文
- 8) 李榮大・浅川昭一郎 (1989) : 韓国デグ市と札幌市における住民の緑地意識比較, 造園雑誌 **52** (4), 255-262
- 9) 李榮大・浅川昭一郎 (1989) : 住宅街路景観構成及び緑の評価に関する韓日比較—大邱市と札幌市を事例として—, 日本建築学会北海道支部研究報告集 **62**, 245-248
- 10) Lee Hyun Sun (1980) : 大邱市住宅庭園に関する基礎研究, Hyosung Women's Univ. 論文集 (不明), 7-22,
- 11) 根元泰人・井手久登 (1983) : 住居環境における緑の質と住民意識の関係, 都市計画学会学術研究発表会論文集 (18), 91-96
- 12) 札幌市 : 札幌市の人口と住宅—昭和 55 年国勢調査結果報告集—
- 13) 鈴木成文編 (1987) : 日本と韓国の住居の近代化過程の比較考察—住様式の持続と変容, 住宅建築研究所
- 14) 申成潤 (1986) : 韓国現代住居の社会文化的変化要因に関する研究—住居類型の文化的変種に関する考察, 高麗大学大学院建築工学科, 修士論文
- 15) 田代順孝・渡辺輝明 (1978) : 宅地の利用制御のための基礎的研究, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集 (13), 49-54

The structure and consciousness of private gardens in Korea

Summary

There have been several papers which emphasize the advantage of private gardens for greenery environment in urban residential areas. The present survey was conducted to obtain some pertinent factors for tree planting in housing lots in Korea, based on the true state of plantings and people's attitudes toward gardens or outdoor space in housing lots. For this purpose two questionnaire surveys were carried out in typical residential areas in Daegu in 1987 and 1989. The major findings are as follows:

- 1) Judging from the results, we can point out that a housing lot size of a minimum of approximately 151m² is necessary with at least 81m² unbuilt space required for the plantings, and housing lot size of at least 201m² is desirable.
- 2) Although respondents had a tendency to determine the acceptable garden size on the basis of the actual size of their gardens, a minimum of 33m² to 66m² (desirable) was desired.
- 3) Some respondents background factors such as; size of housing lot, education and whether or not they owned a house had significant effects on their satisfaction with garden, the reasons why they wish to have a garden, and the tree and garden size which they desire.
- 4) Compared with the results of studies in Japan, we can point out that fewer trees were planted in the same sized housing lots because of higher building coverage.
- 5) Although the reasons why people wish to have gardens were not so different from the results in Japan, respondents rate who replied that "trees in housing lot are important for greenery environment and street landscaping" was much lower.
- 6) The results suggest that we have to take into consideration some cultural differences between Japan and Korea (e.g., house type, high border of housing lot, people's attitude toward garden, etc) when we make a green plan for housing lots.

Key Words : korea, madang, consciousness of private garden.